



4 松田緑山《撰津箕面山瀑布》

にまかれることになる。緑山が大阪に滞在中、龍雲舎で制作された作品として《撰津箕面山瀑布》(図4)(神戸市立博物館蔵)が、現在確認されている。またこの時、若林長英の経営する猶龍堂も緑山との深いつながりから、龍雲舎と相前後して緑山の指導を仰いだとするのはごく自然な成り行きであったろう。田村宗立は前述のように既に緑山と面識があったといわれるが、緑山の下阪の月日が一月余り早まった現在、小山が《有栖川像》を制作していたとき、小山は猶龍堂に於て緑山と関わりを持ったのかどうか断定することは出来ない。緑山の三カ月という滞在の最後は果して何時であったのだろうか。

それに加えて緑山に従って下阪していた玄々堂社中の洋画家松岡正識が、一時龍雲舎に滞在した後、水口龍之介が経営する印刷会社臥龍館で石版制作に従事している。水口もまた緑山の幕末期からの弟子であり、緑山が大蔵省の命で東京へ進出した時、緑山の下で大蔵省の金札製造に従事した間柄である。この臥龍館が石版器械を導入したのは明治十三年のことで、おそらく松岡の入館によって漸く本格的な石版印刷が始まったものと思われる。

このように明治十四年、大阪では緑山と関係のある有力な銅版印刷業者(いずれも社名に龍の字が付く)を中心に、旧来の銅版印刷の傍ら石版印刷が急速に広まって行くことになる。またこれと殆んど相前後して京都に

於ても京都府画学校でその取り組みがなされ、小山三造や田村宗立等によって行われている。明治十四年の京大阪に於ける軌を一にした石版印刷の勃興は、あたかも明治七、八年頃東京に於て陸軍文庫や紙幣寮あるいは民間の梅村翠山の経営する彫刻会社や玄々堂などで、先を争うように一斉に石版術が普及した状況を髣髴とさせるものがある。

《有栖川像》の出現は、この制作後、京都府画学校を去り、美術教育者を離れて石版印刷業者へと転進していく洋画家小山三造にとって《老人像》と共に、その出発点に位置する作品といえるものである。そしてまた、小山が京都と大阪の両地区に跨って、関西の最も初期の石版制作に関わっていた事実を物語っている。

#### カメラマン池田三四郎

森 仁史

池田三四郎が昨一九九九年十二月十五日に死去した。九十歳であった。多くの人々にとっては戦後に松本民芸家具の再興を提唱し、それを中央民芸家具という会社組織として運営し軌道に乗せた立役者として記憶に留められることであろう。このテーマについての池田の二十冊近い著作はいずれも洛陽の紙巻をたかからしめていることは周知の通りである。事実、三月九日付けの朝日新聞は松本支局の記者による追悼記事を掲載し、池田の生涯を奈良井宿保存運動を中心に紹介していた。

実際、彼を民芸運動の指導者として受け止める向きが多いことと思われる。しかし、それは昭和二十四年(一九四九)池田が四十才の時からのことであり、いわば後半生を柳宗悦との出会いを経て家具製作に捧げたと言ふべきなのである。彼の人材育成の手法として特異だと思われることに、

昭和四十四年（一九六九）に設立した松本民芸館に自ら世界各地の家具を収集し、新入社員にその日常的維持管理をさせることで思想を伝えようとしたことがあげられる。つまり、若いクラフトマンがここで共同生活を営み、日々修行僧のごとく家具の手入れをすることで、「民芸の語る真実をたずねつつ、環境のなかに生まれる有形無形の暮らしの真理に心をひそめる」ことを求めたのであった。ここには明確に共同体的ユートピア思想が語られているのだが、それがカウンターカルチャー真つ盛りの一九六〇年代末の松本であったことは同じ時代を同じ街に暮らした私にとってきわめて鮮烈な印象を刻んだのであった。この時に、同じ近代批判の立場にありながら、池田と対極に位置した私はいわば黄泉の深淵に呼び込まれるのを忌避するようにその手法から後ずさりしていた、と今なら言えることだ。

池田の前半生は同時代のデザイン運動と様々に接点を持つものであったが、ここにその一端を書き留めておくことで、池田の関わりとうとしたデザイン活動のベクトルと彼の宿した本質をさらに踏み込んで理解する助けとなるだろう。多くは『松本民芸家具への道』（沖積舎、一九九〇年）に本人自身が書き残しているが、かなり恣意的な要約も散見されるので、いくらかの調査結果や生前池田自身から得た教示で補充しておきたい。

池田は松本市本町の老舗呉服店三原屋（三六呉服店と称した）の四男として生をうけ、四郎と名づけられた。松本中学時代の放蕩がたたつて受験に失敗し、上京して浪人生活を送ることになった。池田家の親類が近くに住む蔵田周忠と懇意であったため、彼から建築専門の写真家になることを勧められて東京高等工芸学校印刷工芸科写真部を受験し、合格した。朝日新聞社のカメラマンとなる影山光洋が二年先輩であり、戦後に建築写真で名をなす平山忠治と同学年であった。多くの記事が写真「科」としている写真部は一九一五年二月に業界の強い要望で東京美術学校に臨時写真科として設置されたが、一九一九年の東京高等工芸学校設置と共に主任の鎌田彌壽治ともども同校に移設された。池田の印象では彼が入学した頃から表現としての写真から化学としての写真へと力点が移っていったとい

う。



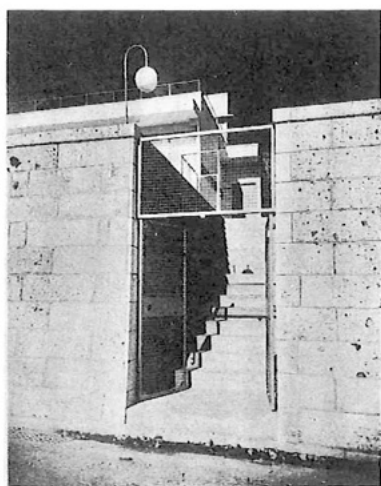
1 東京朝日新聞社懸賞広告写真「ブラジル珈琲」1933年

この頃、池田の住んだ同潤会代官山アパートでは豊口克平が隣室であった。蔵田を指導者として松本政雄やこの豊口が中心となって型而工房と名付たデザイン実験同人が一九二八年に発足した。かれらは造型としての家具ではなく、生活意識や構想を具現化する手段としての家具を日本で初めて追求しようとした。展覧会のほかに紀伊国屋で少なくとも二度講習会を主催した。ここで、当時としては画期的な試みとして、研究映画と称する十六ミリフィルムによる人間工学的な実験を上映したのである。池田の回想によれば、「始めにパンツ一枚の若い男の人が椅子に座っている。その人が椅子に掛けたら、両手を広げて泳ぐような形をしようと、パツとテールが現れる。また右のほうに斜めに手を伸ばすとそこに本立てが現れて、仕事に都合のよい大きさ、距離などが動的に示される」といった内容であった。監督は川喜多煉七郎、撮影は池田であった。これは第一回講習会とのきのものと考えられる。残されたチラシでは、第二回講習会の研究映画は「厨房と食器の整理」と記されている。

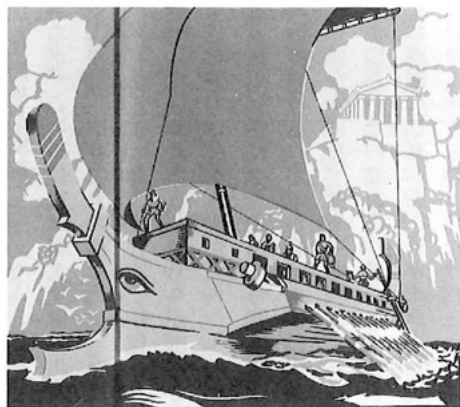
池田は在学中に社会主義思想にシンパシーを覚え、城西地区赤色救援会メンバーとなった。これには工芸図案科の鈴木豊次郎助教を中心とする学内の演劇研究サークルの活動がきっかけとなったため、以後鈴木の下



2 銀座聖書館ビルのブラジル  
珈琲ショールーム



3 建築 (土浦亀城邸)



4 『小学科学絵本』第5巻「汽船」の挿絵 1937年

での立場は気まずいものになったようだ。池田は語っていた。学校にメンバーが知られて何名かが退校処分となったものの、池田は結核療養中であつたために逮捕も処分も免れ、一九三二年三月に卒業した。この非転向ながら体験は彼の底意に沈潜し続けたことであろう。

池田は卒業後、商業美術研究所に勤めたが長続きせず、海岸写真屋になる。一九三三年には東京朝日新聞社懸賞広告写真に応募して、ブラジル珈琲(図1)の作品が入選している。この懸賞は当時広告写真が花王石鹸の木村伊兵衛作品の使用にみられるような構成主義的な表現にだれをうった傾向をよく表しており、池田の作品もかれの関心がこの方向にも旺盛であつたことを語っているように思える。このブラジル珈琲は銀座四丁目の聖書館ビルにモダンリズム感覚にあふれるショールームを構え(図2)、藤田嗣治の壁画(一九三七年制作、現在はフジタ本社一階に移設)とパイプフレーム家具が備え付けられていた。よほど宣伝効果が大きかつたらしく、人工着色によるパノラマ口絵つき案内パンフレット『ブラジル珈琲の話』(一九三五年頃)が発行されている。池田と同年の東京高等工芸学校工芸図案科出身の土谷幸夫が宣伝部員であつた。土谷はシュールレアリスム

を経て抽象絵画の制作を展開していくが、そのキャリアの大半は広告作家としてのものであつた。

また、同じ年に池田の作品は『光画』第二巻第十号にも見出せる。この雑誌では作品にタイトルをつけてないが、建築(土浦亀城邸)(図3)、人物(蔵田建築事務所の助手鈴木三郎)、赤ん坊(西田正秋論文に使用)の三点であつた。これについて大東元は「空を落としたのは入口を誇張するためにやつたので芸術的に面白くはないかと思ふ。赤ん坊の方はなにか微笑ましい気持ちに於て面白い」と評している。大東も同校写真部の一年後輩で朝日新聞社のカメラマンとなつた。ここでの池田はむしろストレート写真風なキャンデイド・フォトを試みているようだ。いずれにせよ、当時の実験的な写真の動きに切り込もうとする姿勢が如実にみとれる。

一九三四年には、渋谷区八幡通りに実家にちなんで三六工房と名づけた写真スタジオを設立して独立した。この頃、近くに住む頭山満の知遇を得ている。翌年にはこれまでは戸籍上は四郎であつた名を三四郎と改名した。この頃懇意にしていたのが当時日活映画の宣伝部長だつた山下謙一(一九三〇年工芸図案科卒業)であつた。山下は松竹パラマウント社発行の『SP』

誌表紙や『人情紙風船』（山中貞雄監督、一九三七年）のポスターデザインで知られるが、この他に『ゴドモノクニ』の版元である東京社から一九三七年に出版された『小学科学絵本』のうち第五巻汽船（図4）、第八巻家、第十巻石油の挿絵を担当している。これらの挿絵は明るい三、四色の磨き石版印刷によって動きのある構成主義的な画面をつくりだし、旧来の児童絵本に見られない新鮮なインパクトに満ちていた。しかも、その手法は明らかにソ連の児童絵本から取られたもので、彼らの心情のありかが奈辺にあるかを雄弁に語っているように思われる。

この頃から池田の建築写真家としてのキャリアが始まる。主な発表舞台は『新建築』『国際建築』『住宅と庭園』などであった。わけても、彼が師と仰ぐ蔵田との関わりが深かった『国際建築』ではかなり多くの写真を撮ったと池田自身が語っていた。また前号の西川、村山と同じく山下もここでYAMと三文字のサインを入れていることは興味深い。

この雑誌は一九二五年一月に創刊された『国際建築時論』が休刊したのを受けて、『建築世界』編集に携わっていた小山正和を実務的な中心として一九二八年に早稲田系の同人組織国際建築協会によって改めて『国際建築』として創刊されたものであった。蔵田のほかに菅原栄蔵、能瀬久一郎ら一八名が同人であった。この当時の丹羽美による同人カリカチュアは当時の雰囲気を生き生きと伝えている。インターナショナルスタイルへの転換期へ差掛かった理論先行の一九三〇年代の建築家集団のなかでこうしたパーソナルな記録は新鮮に感じられる。この丹羽や蔵田、山中節治はドローイングの手腕に優れ、際立った冴えを見せている。描く能力に長けた蔵田たちにとって思想や意識を盛るためのインターナショナルスタイルや機能主義デザインはあるいは自らの才能を殺しかねなかったのではないか。このことはグラフィックデザインにおいて、写真による構成手法を中心とする亀倉雄策らの世代の登場が描くことを主たる技法とする世代からの転換をもたらしたととバラレルのように思われる。

蔵田や山中、彼らが一時籍をおいた建築事務所長の関根要次郎はみな工

手学校出身であった。『国際建築時論』はこうした工手学校生徒向けを意識した編集方針であったが、この時代には帝大工学部出身の設計者とその助手以上にはなれない工手学校出身者との間には大きな隔絶があった。そして、一九四〇年代の戦時下には、日本工作文化連盟へとこれらのモダニズム建築運動が総て収斂していったとき、どちらが排除される立場に追いやられるかも明らかだったのではなからうか。

親友の山下は戦死し、蔵田が排除された時、写真スタジオを戦災で失った池田は故郷で格納庫建設をはじめとする戦時の建設事業に没頭し、その後は再び東京に戻ることにはなかった。そして敗戦による目標喪失の闇のなかで柳宗悦に出会うことになったのである。彼のドラスティクな転身を突き動かしたのはその深層にこれら若き日々の池田と彼を取り巻く人々の生き様の影を宿していたと考えるのは私だけだろうか。



5 池田三四郎(右)と高橋実

# 一寸

第二号 二〇〇〇年五月

新・旧刊案内2

青木 茂

## 第二号目次

新・旧刊案内2	青木 茂	1
三間印刷所抄録	岩切信一郎	3
— 慶雲堂三間七兵衛と三間印刷所三間隆次について —		
残されたひとやま	大谷 芳久	8
— 藤牧版画の後摺りについて —		
日録にない図画教科書 (二)	金子 一夫	12
大屋愷故『図学入門』		
山内神斧のこと	丹尾 安典	15
— 石井桃子君の追跡 —		
京阪の石版画・明治十四年	森 登	20
銅・石版画遺聞2		
カメラマン池田三四郎	森 仁史	23
お札博士スタイルの記1	山田 俊幸	27
古本歩き・横浜の巻 II		

(一)

昔のことをよく知っている友達が、青木は若いころから「年をしたら小説読みになりたい」と言っていたという。「小説読み」とは聞き慣れない用語だということでもその人も覚えていたのかも知れないが、年をしても私はまだ小説読みになれないでいる。先日、横積み本の下から藤枝静男の『空気頭』が出てきた。彼の医学解剖学的無気味私小説は時に辟易しながら私小説を無限に展開させたものとして、私はよく読んできた。『空気頭』の終りの方には非現実的な医学実験による幻想談が展開されるがそこに趣味的な個人雑誌『瓜茄』が引かれている。藤枝氏は浜松の泰光堂か典昭堂で『瓜茄』を見つけたのであろうと推察するのは、小説読みの私小説的読み方の楽しさである。あの古本屋ならば『瓜茄』ぐらいありそうだ。さらに、藤枝氏は第五号しか見なかったと邪推できるのはイジワルぢいさんの古本読みの醍醐味である。

『瓜茄』は京都今熊野の奥村伊九良によって出された個人雑誌で五冊で完結休刊した。細かに書けば一号・昭和十年五月、二号・十一年二月、三号・十一年三月、四号・十二年五月、五号・十四年二月の刊行で、菊判通し六百ページほどの中国美術研究誌である。この雑誌によっては奥村氏の年齢経歴などはほとんど不明である。ただ、大正十五年秋、単身山西省玄中寺を尋ね珍しい鉄仏の写真と拓本を発表しておられ、昭和のはじめ頃から天龍山に登ったこともあり、六年春には北京にあって、北京の四季を綴った文章も見える。雲崗へは二度行って一ヶ月あまり調べ、北魏の瓦当や菩薩の頭を持ち帰られたようである。京都大学とは非常に縁の深かった人であるらしい。